成果発表会 ～1年間の活動について交流しました～

- 震災を経験した者、してない者、したけど記憶がない者、今の若い人には震災の経験をしてない人や覚えてない人が増える中、自ら地震に対して、憤りを抱き、経験者から受け継ぎ、後世へ自分なりに言葉や商品、そして踊りを通して県内外を越え世界に発信していることを改めて実感し、自分たちの活動は自分たちだけでは小さな力かもしれないが、事業を通しながらも多くの方へ届いていることに対して非常に嬉しく思った。14年経った今も、「復興半ばである福島だから」「震災を経験した県」だからこそできることを再確認できた。これからも地震や水害など被災する県や地域は必ず出てきてしまうからこそしっかりと対策し、何より命を繋ぎ、復興の礎を少しでもいいから行動していきたいと思った。本事業のおかげで活動範囲を広げ、信頼を得られたこと、そして発表会を通して同じ目標の仲間たちをつくることができ、今後も奮闘していく糧になった。これからも自らができることを着実に行っていくことを誓う。
- 自分の学校以外の団体の方々が1年間、どのような活動を行ってきたのか、どんなことを学び、そして考えてきたのかを知ることができて参考になったし、刺激をもらった。様々な方法で福島について深く知り、誰かに笑顔を届けるとともに、たくさんの人に福島のよさを伝えることができた経験は宝物である。自分より年齢の若い小学生の行動力や福島に対する思いに感心し、自分もさらに故郷である福島を見つめ直したいと思った。

つないできた未来

～本事業を経験した先輩の姿より～

- 本事業を通じ、より地元への興味が高まり、自分で行動する自発性も身についた。それをきっかけに探究活動では地元スーパーと協力し、いちごのフレンチトースト、クッキーサンドを開発した。卒業後は第一希望の地元企業に就職する。
- 本事業を通じ、福祉に興味を持ち、高校卒業後、言語聴覚士になるために新潟の大学で頑張っている。
- 本事業を通して資料を見ただけでは分からない気づきがあった。今は大学生になり、実際の場所を訪れ、自分の目や耳で「知る」ことを心がけている。
- 本事業を経験し、福島県の伝統工芸の伝承の大切さを実感し、復興途上の福島県の実情を自分の肌で感じることができ、自分の言葉で伝える表現ができるようになった。防災減災で個々の命を守る活動が、伝統を受け継ぐ未来を守ることに繋がると強く感じた。今は福島大学の行政政策学類に進学し、将来は災害に強い「まちづくり」をしたいと考えている。
- 本事業を通じて、神戸の震災経験者との交流や、福島県の震災授業を県外で行い、伝える大切さを実感した。幼稚園教諭となり、幅広い災害に自助の意識と知識を持った子どもたちを育てたいと考えている。
- 本事業を経験し、自分の生き方を考えるきっかけになり、保育士を目指して勉強している。
- 本事業を留学時に経験し、帰国しても日本の思い出として発信している。
- 本事業で実施される活動が毎年後輩と交流する機会になっている。
- 福島の今を伝えたいという気持ちを強くし、「カタールワールドカップ」の会場で支援への感謝を伝えたり、現地の大学で福島の現状を英語でスピーチしたりするなどの取り組みを行った。
- 災害現場で命を救う人になりたいという思いを強くし、救急医療学科のある大学に進学。現在はさらに専門知識を高めるため、大学院で学んでいる。
- 消防士となって防災や減災に尽力し、人命を守る仕事を行っている。
- 本事業を経験し、子ども会ジュニアリーダーとなって下の世代の子どもたちをサポートする立場として子ども会活動を盛り上げている。
- 本事業を体験し、映像に興味を持ち、映像制作会社に就職し、活躍している。
- 福島の復興に興味を持ち、公務員として活躍している。
- 映像や映画制作に興味を持ち、映像の大学へ進学した。
- 本事業を通して自身の成長を実感し、参加者としてではなく引率側として現在は本事業に携わっている。
- 本事業において、東京・横浜にて「福島PR活動」を行った経験をもとに、マーケティングについて興味関心を持ち、大学ではマーケティングを専攻し頑張っている。
- 被災地でのお年寄りの介護の現状を見て、高校卒業後介護の仕事に就いた。
- 避難所や仮設住宅での被災者の健康状態を見て、看護師になった。
- 本事業を通し福島への愛着と異文化交流に興味関心が高まった。探究活動への取り組みの意欲が高まり、長期休業期間中に短期留学をする生徒が現れた。
- 本事業を経験し、本県の教員となって、震災教育に携わっていきたいと考えている。
- 本事業を通じて、福島の現状と復興を学ぶことができ、科学的な探究活動をより深めることができた。
- 本事業を経験した先輩たちで就職したものの中には、自分の仕事の経験を生かし、後輩たちのサポートをしたいと感じてくれているものもいる。
- 本事業を経験した卒業生と在校生が、ふくしまの震災を風化させないために語り部団体『FUKUSHIMA DAY すばる』を設立し、平和な未来をつくるため「今を知り思いを伝える」「想いをつなぐ」活動をしている。
- 本事業を通して、災害時に人を救う看護師になりたいと思うようになり、福島県立医科大学の看護学部に進学して、福島の教訓を生かし福島に恩返しをしたいと頑張っている。
- 昨年度、同事業で台湾との交流を行った高校生・大学生は、2024 年度福島県教育総合会議で、交流事業の成果を発表した。
- 昨年度、同事業で台湾との交流を行った高校生のうち1名は、今年度も学校主催の交流事業にて、再度新竹市を訪問し、当時のホームステイ相手と再会を果たすなど、今でも交流を続けている。
- 自分たちの住んでいる町以外の町のいろいろなことが知れてよい経験ができた。
- 浜通りの現状を知ることができてよかった。
- 自分の住んでいる町についてよく知れて、どうしたらよいかなどの課題を見つけることできた。（人口減少、観光客が少ないなど）
- インターネットの記事や記録などをたくさん見つけ、その中での共通点や相違点などを見比べ、この町に何が足りないかを考えるよい機会になった。
- 本事業を経験した先輩方は、本事業でドイツエッセン市ウルフスクーレ学校と交流し、それをきっかけに今でもウルフスクーレ学校の生徒・卒業生と交流を継続しているものが多い。今年度のドイツ高校生の福島での受け入れの際にも、複数名の先輩が実際の交流活動に参加し、お互いにこれまでの自分たちの歩みを報告し合うなど、交流をさらに深め、国際的な視野を広めた。
- これまで、沖縄県立八重山農林高校との交流事業を経験した生徒は、本校においてリーダーシップを発揮する意欲の高い生徒で構成されてきた。生徒会役員を担うなど、自ら積極的に誰かのために役に立ちたいという思いがあり、交流を通じて異なる文化や風土を体験し、多様な他者との交流から様々な価値観や考え方を吸収することができた。ある生徒は、地元を支えるという重要性を認識し地元企業に就職したり、また、ある生徒は専門職として活躍するために進学を目指したり、それぞれの道を選択し、歩んでいる。

福島県教育庁社会教育課 令和7年3月発行

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

紙芝居を活用した伝承活動を通して、幅広い世代へ伝えることの意義やその方法を学びました。

商品開発の過程において福島の復興状況を学ぶとともに、販売活動では、消費者の福島への認識を捉えたり、魅力を発信したりしました。

チャレンジ！

子どもがふみだす体験活動応援事業

「ふくしまの未来へつなぐ体験応援事業」

令和６年度　実践事例集

石川県において、震災からの復興の中で福島が学んできたことを発信するとともに、その現状を受け止めてきました。

ハンガリーにおいて、現地の高校生と交流し、福島の現状について伝えることができました。

〈主催〉福島県教育委員会

事業内容・実績

ふくしまの復興に貢献したい！
一歩ふみだす子どもたちを応援します！

東日本大震災から14年が過ぎ、震災を体験、記憶していない子どもたちが増えてきています。福島県では、「ふくしまの未来に向けた創造的復興教育」を実施し、新生ふくしまを担うたくましい子どもたちの育成を図っています。

この事業では、復興を教材とした福島ならではの社会体験活動・社会貢献活動を推進し、復興に貢献しようという想いを高めています。また、その想いを具現化し、主体的に復興の発信や教訓の継承等に寄与する社会体験活動を県内外で広く行うことで、子どもたちの「志」を育み、復興・地域創生の担い手を育成する事業です。

採択条件

子どもたちが主となって自ら考え、判断し、行動を起こす社会体験活動・社会貢献活動等や地域の復興を支援する取組で、以下のいずれかの視点に係る事業とします。

（1）被災者や避難者、復興関係者、支援者等との交流活動等の取組
（2）地域の復興を考え、県内や他県、海外等へ復興をアピールする取組
（3）地域の将来を見据え、地域活性化を実現する取組

補助事業者

福島県内に主たる活動拠点があり、県内に事務所を有し、地域において青少年育成活動に取り組んでいる実績を有している団体（市町村、学校、PTA、NPO 等）

【補助額】事業1 上限 50万円　事業2 上限 200万円

※補助金額は、補助対象経費の 8/10 以内、または上限額どちらか低い額。
※海外での活動も認めます。（ただし、海外渡航に関わる経費のみ令和６年度で終了）

事業1
元気を届ける交流・体験事業

避難者や被災者との交流を通して、子どもたちが元気を創出する活動

（例）仮設住宅、復興住宅等訪問及び被災者、避難者との交流 等

主体的・対話的で深い学びの実現

事業2
今を知り思いを伝える事業

① ふくしまの「今を知る」活動
② 復興への「思いを伝える」活動
※①②のどちらも子どもたちが主体となって行うことが必須

（例）・「被災地や震災関連施設等の訪問」や「被災者、避難者との交流・協働」 等
・「地域の復興を考え、県内外への発信を行う活動」や「復興へ向けた取組や現状、ふくしまの元気や地域の特色の発信」 等

復興を教材とした課題解決型学習

地域への誇り　自立心　創造性　社会性　困難を乗り越える力　実行力　郷土愛

自己肯定感の高まり

新生ふくしまを担うたくましい子どもたちの育成　福島ならではの教育として全県で推進

事業実績

令和６年度は２５団体からご応募いただきました。採択実施団体２４団体
事業１：１団体　事業２：２３団体 となりました。

事業の流れ

※「元気を届ける交流・体験事業」は、P3をご覧ください。

❶ ふくしまの「今を知る」活動
～震災のことや復興の状況を学ぶ～

地域の「もの」に触れる体験を通した
「今を知る」

防災キャンプを通した
「今を知る」

経験者インタビューを通した
「今を知る」

震災関連施設等の見学を通した
「今を知る」

「知った今」をまとめる
～デジタルで～

「知った今」をもとに対話
～グループで～

「知った今」をもとに対話
～全体で～

「知った今」をまとめる
～紙で～

❷ 復興への「思いを伝える」活動
～多様な表現方法で学んだことを発信～

販売活動を通して
「思いを伝える」

音楽活動を通して
「思いを伝える」

プレゼンテーションを通して
「思いを伝える」

演舞を通して
「思いを伝える」

「思いを伝える」
中での双方向の学び

オンラインを通して
「思いを伝える」

実践事例 事業1 元気を届ける交流・体験事業

事業名 ～3.11の絆をわすれない 楢葉からありがとう～ 会津美里町 楢葉町 絆伝承・交流宿泊体験活動2024

団体名 会津美里町

この事業のポイント

姉妹都市である楢葉町において、東日本大震災の体験を風化せず、次世代につなぐため、学校活動では体験のできないことを経験し、会津美里町と楢葉町の子どもたちの交流を図るものである。

具体的には、楢葉町の天神岬スポーツ公園を中心に、豊かな自然環境や日常とは異なる生活環境の中での集団生活や体験的活動を通して、異年齢も含めた子どもたちはふれあいを深め、自立心・協調性を育くむとともに、自然の雄大さ・大切さを体感した。

また、両町の子どもたちとの交流や、震災遺構の見学、交流についての語り部の講話を通して、東日本大震災時の楢葉町と会津美里町の交流について知り、助け合いの大切さについて考えを深めるとともに、会津美里町での交流事業（雪体験など）につなげることができた。

JAEAにて説明を受ける

取組内容

みるーる天神において、楢葉町の担当より震災時の説明を受け、震災の被害状況を知ることができた。引き続きJAEAに移動し、震災復興に向けた取り組みを見学した。

野外炊飯では、マッチを使った火起こし体験を行うとともに、防災食にもなるカレー作りや、初めての飯ごう炊飯にも挑戦した。

天神岬スポーツ公園において、牛乳パック使ったホットドック作りに挑戦した。また、岩沢海水浴場において、磯遊びや海水浴を楽しむことができた。

実践事例 事業2 今を知り思いを伝える事業

事業名 福島県の復興のために

団体名 福島県立福島商業高等学校 商品開発同好会

この事業のポイント

福島県の復興を願い、福島市の観光資源を生かした桃や吾妻小富士の雪うさぎをモチーフにうさぎのデザインで桃の果肉入り「ふくうさぎ」を作り、県内外のお客様は福島市の桃を目当てに訪れる方が多く、一番人気であった。福島から連想してフクロウをデザインに「福ろうぱん」を作り、デザインの可愛さで売れた。

賞味期限5年の「満福パン」は食べ応えもあり、非常食として活用でき、学校校舎をパッケージにデザインし、居間に置いて福島商業高校の話題に花を咲かせていただき、非常時には持って避難できることをアピールできた。北海道の福祉施設で製造し、矢吹町の授産施設に包装を依頼して仕事を提供でき社会貢献につなげた。売り上げの10％を浪江町に寄付することで地域貢献につなげることができた。この活動をレポート化して、生徒商業研究発表大会では県大会で最優秀賞を受賞し、東北大会でも優良賞をいただいた。販売だけでなくプレゼンテーションのスキルも向上できた。

いわき・ら・ら・ミュウ販売

取組内容

4月にテーマ設定・商品開発で高校生にできることを思案。5月より関係機関とタイアップしてデザイン。試作と試食を重ねて商品開発。7月より販売活動。研究内容をまとめ、福島県内はのみならず、東北でも発信活動を展開。国見あつかしの郷では、販売活動を4回。9月震災学習として浪江町ボランティア活動。10月いわき・ら・ら・ミュウにて販売。12月には日本橋ふくしま館MIDETTE(ミデッテ)販売。

事業名 高校生の紙芝居による伝承活動応援事業

団体名 特定非営利活動法人富岡町３・11を語る会

この事業のポイント

『ふくしまの未来』を繋ぐには、「伝承」こそは重要な活動だと考える。世界に類のない複合災害に見舞われたふくしまから目をそらさずに、「知ること」「考えること」「行動すること」が『ふくしまの未来』に向き合うことになる。「記憶にない世代」と言われる高校生が、ふくしまの「震災」を通して、その「現状」「課題」「未来」について、「知りたい」「考えたい」「なにか行動したい」と一歩を踏み出すには、どのような方法があるだろうか？

「紙芝居」は民間の文化伝承の方法として長い歴史を持つ。画面（紙面）という媒体を介して、しかも「物語」の主体となって聞き手に伝えることができる。「高校生と紙芝居との出会い」は、この活動の大きな突破口となった。「紙芝居を読む」「紙芝居を創る」ことにチャレンジした高校生は、地域の町民、子どもたちと世代を越えて思いが伝わるのを実感し、「ふくしまの今と未来」を自分事化することができた。15名の参加者の15の自作紙芝居が実証している。

富岡児童クラブでの紙芝居上演

取組内容

【取組①高校生の紙芝居上演】 参加する高校生が、震災の語り部として活動している人たちと交流して話を聞くことで、震災の伝承の内容や方法を知る。「紙芝居」について、専門の講師から「紙芝居の歴史」「文化としての価値」「読み方」などを学び、紙芝居の魅力を発見する。紙芝居として伝えたい震災に関するテーマを選び、上演技術を工夫。実際に、幼稚園、児童クラブ、地域などで上演する。

【取組②高校生の紙芝居制作】 福島に学ぶ高校生として、地域の課題、魅力、震災、避難生活、防災などをテーマに、オリジナルの紙芝居を制作する。参加した生徒が自ら文や絵をかくことにより、震災に関する情報などを自分事化として捉えられた。

事業名 復興五輪とオリーブが築いた絆 楢葉町・古代オリンピア市 交流事業

団体名 楢葉町

この事業のポイント

本事業はギリシャという海外での発信を目的とし、そこにいたるまでに自分たちの地元から県内、県外へと少しずつ活動・交流対象を広げていったことにポイントがある。それにより、震災や復興の捉えが多角的になっただけでなく、対象者にどのように伝えればよいかという発信の工夫の重要性へと自然に目が向くこととなり、試行錯誤しながらも、常に自分たちの言葉で伝えようとする子どもたちの姿が見られるようになった。ギリシャでの活動では、通訳を介さずに英語でスピーチをしたが、目を見て自分の言葉で伝えたいという思いに至り、最後には自主的に暗記をして堂々と福島の復興について語ることができた。また、同年代の小学生との交流を重視したことで、ギリシャの子どもたちは福島だけでなく、日本に対する興味や関心も高まったようであった。欧州における「フクシマ」の風評の払拭、さらには国際親善という点においても非常に大きな成果につながった。

オリンピア小学校での交流で仲を深める子どもたち

取組内容

はじめに、震災や復興などについて、放課後や長期休み期間中の放課後子ども教室を中心として、町内の廃炉関係者や語り部などを通じて知見を得るとともに、能登半島地震の被災者への継続的な支援、東京そなエリアでの活動などを通して、震災が与える影響についても実感を伴った理解を得た。さらに、会津美里町や鎌倉市の子どもたちとの震災学習、代表児童による「ぼうさいこくたい」での発信や輪島市との交流など、様々な人との学びあいの機会を通して、震災や復興について多角的に捉えた後、11月に渡欧し、日本大使館、オリンピア市役所、オリンピア小学校、ザハロ小学校、そしてギリシャ大使館と、およそ150名の人々に対して、福島の実情や復興に対する思いなどを英語で発信し、交流した。

事業名 Agriで探る未来（Culture）創造プロジェクト

団体名 喜多方市立関柴小学校 喜多方市立第一中学校

この事業のポイント

東日本大震災とそれに続く原発事故で、大熊町では、未だ避難生活をしている方々がいる。一方で、小中学校の子どもたちにとっては、過去のものであり、未曾有の大災害でも、どこか「他人事」である。

そのような中、大熊町では、困難を克服しつつ復興に向けての努力を続け、復旧復興の段階から、他に先駆けた取り組みを行っている。

本事業では、震災を子どもたちの実感を伴った理解とするために、生活の痕跡が残る空き家が放置された町の現状の見学、たくましく学ぶ大熊町の子どもたちとの交流を行った。また、最先端のイチゴ工場、水稲の試験栽培を見学し、復興に向けた力強い営みを学んだ。

この力強い姿に学び、ふるさと活性化の課題に対処するため、子どもたちは、喜多方、大熊町の地域の宝を生かした特産品の開発と販売活動に取り組んだ。

活動を通して、ふるさと本来の魅力に目を向け、掘り起こし、考えたことを形にする喜びや、発信する喜びを実感した。

学び舎ゆめの森にて

取組内容

○大熊町立学び舎ゆめの森の子どもたちと交流を行い、親睦を深めるとともに共同作業の進め方を学んだ。
○水稲の実証栽培現場、土を使わない、コンピュータ制御のイチゴの栽培工場を見学するなど、復興のその先に向けた大熊町の力強い取り組みを学んだ。
○地元に戻り、ふるさとのよさを生かして起業している方々から、起業の考え方について講演いただくとともに、商品開発の指導をいただいた。
○実際に販売活動を行い、自分たちで考案したことが形になる喜び、売り切れたときの喜びなどを体験し、子どもたちは「震災学習で学んだことをもとに、未来のふるさとに役立つ活動を皆ですることができてよかった」という思いを得ることができた。

事業名 福島を知る・伝える・盛り上げる2024

団体名 福島県立ふたば未来学園高等学校 社会起業部

この事業のポイント

双葉郡内に唯一となった高等教育機関のふたば未来学園は、地域と連携し、原発事故によって発生、あるいはそれが加速させた諸問題を考察する探究活動などに力を入れている。私たちの社会起業部という部活動では、双葉郡や福島県を「知る・伝える・盛り上げる」をモットーに、他県から訪問する高校生・大学生と交流活動や動画制作などをしている。本年度も、福島のことを知りたいと本校を訪ねてくる他県の高校生や、日本を訪れる外国の方などと交流した。

また、福島の原発事故を考察するにあたって、原発事故は核の問題としては広島的であり、NIMBY施設としては沖縄の米軍基地的であり、環境問題としては水俣的であるという仮説から、沖縄と水俣でフィールドワークを行っており、2024年末には普天間と辺野古で研修、2023年末には水俣研修を行い、福島との比較をするとともに、福島の現状を伝えた。

辺野古海岸におけるフィールドワーク

取組内容

「伝える活動」…他県の学生（計６校）との交流および、全国各地から訪問した中学生と交流した。120年前に書かれ、現在もその提言が生きる半谷清寿『将来の東北』をわかりやすい言葉で要約する冊子を作成、12月には頒布イベントに参加。
「盛り上げる活動」…お買い物チャンネルＱＶＣ制作オリジナルショートムービー『HAMADOORI the Movie』に出演。
「知る活動」…7月、足尾銅山学習のため栃木研修（とちぎTVと下野新聞より取材）。11月、双葉郡スタディツアー。12月には沖縄研修を行った。普天間・辺野古フィールドワーク、外国人観光客へ福島県のPRを行った。

事業名 『福島の～今日までの願い～を明日の希望へ伝える』今残すべきもの。

団体名 子どもに音楽を贈る会

この事業のポイント

音楽を中核とした各活動を通じて、子どもたちの発する問題提起により、大震災の生活への影響、子どもたちの人間関係への影響などについて、発表を見る人が考えることができるようになり、少しでも風化を防ぐ効果がある。

特に、県外の開催においては、改めて福島の震災の根深さを知り、震災を自分のものと考える契機になり、自治体、教育関係者などによる被災地視察も組まれ継続的な関係が生まれてきている。

当事業の実施により多くの音楽会を実施し、活発化させ、地域・文化振興にもつながっていく。また、子どもたちの語り部としての震災授業と『福島の今を発信展』を組み合わせ、ミニコンサートや地域の方々との交流や心の防災コーディネートMAPを配布することにより、今現在の福島の復興状況や福島に生きる人々の心の葛藤と希望をより強く伝えることができ、発信する側も、震災の影響を受けている子どもたちの心の整理や、被災当事者の方々に伝えていく大切さを感じることができる。

福島県伝統工芸 大堀相馬焼
半谷窯・半谷秀辰さん
震災体験講話と工芸体験

取組内容

①「福島しあわせ運べるように今の思いを発信プロジェクト」
- クリスマスLive配信

②「福島の今の思いを発信活動」
- 福島の伝統工芸体験学習会（大堀相馬焼）

③発信用冊子「心の防災コーディネートＭＡＰⅣ」取材・学習会
- 東日本大震災学習会(宮城県・福島県)
- 新潟県中越地震学習会・発信活動
- 今の福島発信震災授業(山古志小中学生と地域の方々)

④阪神淡路大震災学習会・発信活動
- 「神戸親和大学」との交流
  『福島の今を発信展と今の福島発信震災学習』
- 神戸市長田区「大正筋商店街」コンサート
- 神戸の小学校教諭の方々へ震災発信授業と交流会

⑤発信用冊子「心の防災コーディネートＭＡＰⅣ」
- 震災取材の方々、「今の福島発信震災授業」等、交流時に発信素材として配布し、ともに学んだ。
- 資料展示『福島の今を発信展』を震災学習と組み合わせて子どもたちが解説者となり同時に開催した。

事業名 演劇を通じた高校生による葛尾村の震災と復興の記憶発信事業

団体名 一般社団法人葛力創造舎

この事業のポイント

地域の震災と復興の記憶は、文字などの媒体で発信すると事実は伝わってもその思いはなかなか伝わりづらいことがある。そこで、演劇という手法を用いて、事実のみではなく、思いについてもよりリアリティをもって伝えられると考え、本事業を実施した。昨年までの事業から高校生と地域の方々との関係性が構築されており、今年も実施して欲しいとの声があがった。本年度は特に、盆踊りを深く探究することを通じて「伝承がなぜ必要なのか？」「どのように伝わってきたのか？」「これからどのように伝えていくか？」を生徒が学んだ。震災伝承を100年の長期スパンで、さらには世界規模で捉え活動を実施した。

伝承について学ぶ

取組内容

【取組①葛尾村の震災と復興の記憶の保存活動】
参加する高校生が震災と復興の記憶を知り、住民と関係構築をするためにインタビューを行い演劇を創作する。インタビュー先は高校生が自ら探し決めた。

【取組②葛尾村の震災と復興の記憶の発信活動】
インタビュー時に得た葛尾村の震災と復興の記憶をもとに、葛尾村の住民と、演劇を一つ以上創作した。創作に関しては県外のアーティストからの指導をいただきながら高校生が創作を行った。高校生が創作した踊りは実際に葛尾村で上演した。

事業名 元気を音楽にのせて～福島からキックオフ～2024

団体名 Seeds＋

この事業のポイント

メンバーが震災伝承施設を巡り、感じたことをまとめた「福島の今」報告会、Seeds+を題材にした復興支援映画「MARCH」の上映、福島の「元気発信コンサート」を通して、福島の現状や支援への感謝の気持ち、防災／減災の重要性を伝える活動を行うことができた。

福島の今を知る活動を通して、「正しい情報を多くの人に伝えたい」という思いが育った。また、イベントに来てくださった方々の声や、来場者アンケートの結果から、たくさんの方々に福島の復興の様子や食の安全性、防災／減災に取り組む重要性が伝わったことが分かり、これからも福島の復興に寄与したいという気持ちが育った。

地元の保育園児や小中高生と一緒に元気に踊り、演奏を行った。それを見つめる被災地の方々の笑顔は、とても優しく嬉しそうであった。発災後、過疎化の進む村で久しぶりのイベントを楽しんでいただけたことで、音楽の持つ力を感じることができた。

人吉の中学校と合同演奏

取組内容

◆福島の安全性や、そこに住む子どもたちの元気を発信し、福島の復興をアピールする。
- 「いわき震災伝承みらい館」と「東京電力廃炉資料館」を見学し、震災の記憶や教訓を学んだ。
- メンバーが手書きでまとめた資料やのぼりを作成し、「るるぶ南相馬」等の冊子も配布して観光や物産、復興をPR。
- 「福島の今」報告会、映画「MARCH」の上映、「元気発信コンサート」を開催。来場者アンケートの結果、ほぼ100％の方々に福島の復興や食の安全、防災／減災の重要性を理解していただけた。また、報告会や映画、コンサートも９０％以上の方々が「非常によい」と評価していただいた。

事業名 福島県立安積高等学校スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）インド交流事業

団体名 福島県立安積高等学校 教務部探究班

この事業のポイント

安積高等学校では、文部科学省スーパーサイエンスハイスクール事業（SSH）の研究開発課題である『チーム安積モデルによる地球的課題解決に向けた国際共創力を有する科学技術系リーダーの育成』の達成を目指して各種事業に取り組んでいる。昨年度までの交流国に加え、南アジアのインドとの関わりを強めていきたいと考え、新たに取り組むことにした。

今年度の事業の中では、震災当時小学校入学前の年齢であり、被災地や避難の状況について知らないことの多い本校生徒が、県内の被災地を訪れることや復興に向けて活動している方の話を聞くことで、今の福島を多角的に理解する。その学びで得た知見を、本事業のリーフレットとしてまとめ、インド共和国大使館の表敬訪問やデリーパブリックスクールジョードプル校の学生へオンライン交流等を通して発信していく。以上のことを通して、県内はもとより県外や世界に対して風評被害の払拭の一助とする。

インド共和国大使館への表敬訪問

取組内容

東日本大震災から１４年が過ぎた福島における課題と現状を、「ふくしまの今」としてまとめていくことで、これからの福島県を担う生徒が、福島に対する思いを強め、震災についての正しい知識を身につけることができた。

また、「ふくしまの今」を身近な地域だけでなく県外・インドに向けて発信することで、生徒の国際的感覚が育つとともに、国内外に対し復興に向けて進む福島についての正しい認識を促す機会にもなり、偏見払拭の一助となった。

さらには、オンラインを通してインドの高校と交流したり、本校ＳＳＨ探究活動発表会・成果報告会で発表したりした。

事業名 あいづっこから広がる交流事業 ～会津から横須賀へ、次世代を担う子どもたちが繋ぐ～

団体名 会津若松市子ども会育成会連絡協議会

この事業のポイント

この事業に参加する小学生は、小学4年生で日帰り研修を、5年生で会津自然の家で1泊2日の宿泊研修を修了した子どもたちであり、その集大成として今回の交流事業に臨んでいる。さらに、過去にこの事業を終えた中学生や高校生の先輩が、今度はジュニアリーダーとして交流事業に参加し小学生たちのサポートを行う。こうしたサイクルを繰り返して、長年続けられている事業である。

この年代の小学生は東日本大震災発生当時はまだ生まれておらず、会津自然の家の所長をお招きし、震災学習を行うことで記憶の伝承を図った。そこで学んだことと、福島県・会津の郷土について、神奈川県横須賀市の子ども会に、交流会を通じて発信することで、同市が震災について考え、福島の復興と元気をPRするとともに、子どもたち自身の成長へとつなげることができた。

横須賀市子ども会との集合写真

取組内容

震災学習として、東日本大震災発生当時の状況や、災害発生時の備え、避難所運営で実際に起こりうること等について、グループワークを通して学習した。また、クイズ形式で会津の郷土について学びを深めた。

横須賀市との交流会において上記で学んだことを紹介し、福島の今について横須賀市の子どもたちにもPRすることができた。また、横須賀市子ども会による郷土の紹介やレクリエーション交流、手作り名刺の交換といった活動も行った。

本市の子どもたちが交流会を通して、初めて会う横須賀市の子どもたちと緊張しながらもコミュニケーションを取り、次第に打ち解けていたことから大変有意義な時間を過ごすことができた。

事業名 こども映画学校 in 新地小学校

団体名 福島こどものみらい映画祭実行委員会

この事業のポイント

第一線で活躍している映画監督、映画プロデューサー等を講師として迎え、子どもたちが10名ずつ3班に分かれて、企画・脚本・ロケーションハンティング・撮影・演技・映像編集・音楽などの一連の映画制作を学ぶ。その中で、ふるさとの課題に触れながら、新しくなる町の姿や、そこに住む人々などを作品のテーマとして考え、ふるさとのもつ意味について感じ取ることができる。

また、地域が抱えている課題について、地域の小学校、教育委員会とも協働をしながら、映像制作を通じ、自らのふるさとについて考え、同じ地域に住むもの同士が、心と心を結ぶことをねらいとする。

地域で撮影する際は、地域住民の方々への出演依頼を子どもたち自身が行い(後でスタッフが詳しく説明に伺う)、交渉能力やコミュニケーションも重要であることを学ぶ。

撮影の一場面

取組内容

①「ガイダンス・班分け・ストーリー作り・カメラや機材の使い方・演技指導」
班分け後、テーマを決定し、ストーリーづくりをした。またカメラや機材の使い方についても学んだ。

②「撮影準備・撮影・編集」
撮影は学校内、または周辺地域で行った。

③「編集・仕上げ・上映」
編集、マルチオーディオ、アフターレコーディング、音楽、効果音をつける前後の映像を比較することで、その効果を体験し、これまでに学んできた震災のことについて発信する際、その効果的な方法について知った。また、作品上映発表時に、舞台挨拶を行い、学びを深めた。

事業名 福島から北陸へ繋げるバトン

団体名 ふくしまバトン

この事業のポイント

私たちがポイントとしたのは、「①東日本大震災について知る」「②能登半島地震・豪雨の被害について調べて、自分たちにできることを考える」「③東日本大震災時の支援の感謝を伝えるとともに福島をPRする」の3つである。

「①東日本大震災について知る」では、参加者のほとんどが震災について知らない、あるいは生まれていない子どもたちばかりだったため、家族に東日本大震災がどんな災害だったのか、またどんな思いで過ごしていたのかインタビューをし、〈地震の被害〉〈原発事故・放射能被害・風評被害〉〈震災後の福島の産業〉の部門に分かれて調べ学習をした。

「②能登半島地震・豪雨の被害について調べて、自分たちにできることを考える」では、地震・豪雨の被害や自分たちが訪問する場所の被害状況を調べるほか、今現在災害で困っている人たちに「子どもの自分たちは何ができるのか・どんな言葉をかけられるのか」を何度も話し合い石川県に向かった。「③東日本大震災時の支援の感謝を伝えるとともに福島をPRする」では、現地での活動において日本舞踊の披露のほか、JAふくしま未来や福島市内の果樹園にご協力いただき持参した福島の特産品（あんぽ柿、大根、ラフランス、りんご、赤べこのキーホルダー）のプレゼント、そして自分たちで調べて作成した震災後の福島の現状と観光・物産についてまとめたパンフレットを配布し、支援の感謝と福島のPRをすることができた。

富来防災センターにて

取組内容

1 事前学習会の開催
「東日本大震災・福島の産業・原発事故・能登半島地震と豪雨」について調べ学習や家族へのインタビューを行い、調べたことを共有して石川県での活動へ備えた。

2 石川県での活動
①志賀町・富来防災センターでの交流会
仮設住宅にお住まいの約60名の方々に日本舞踊の披露と石川県の方々へのメッセージをお伝えし、福島の特産品をプレゼントした。
②とぎ保育園にて子どもたちとの交流会
とぎ保育園の園児と学童の子どもたち約45名との交流会をし、①と同じ内容で活動した。子どもたちには、有志から頂いた赤べこのキーホルダーをプレゼントした。
③金沢市立北鳴中学校の吹奏楽部との交流会
ここでは①②と同じ内容の他、日本舞踊の体験会も行った。

3 福島でのミニ報告会
福島に帰ってきてからは、今回事業に参加できなかった子どもたちや保護者へ向けた事業報告会も開催した。

事業名 ～Fukushimaと世界を高校生がつなぐ“ツナグタビプロジェクト”～

団体名 聖光学院高等学校　タンキュウブ

この事業のポイント

東日本大震災を福島の歴史として捉えている高校生。伊達市からわずか約30kmしか離れていない飯舘村長泥地区や中間貯蔵施設を見学することで、今の当たり前の普通が特別で幸せな毎日だということを再認識する。また現在も様々な問題を抱えているということを知り、自分事として捉えることを目的としている。さらに海外との交流を行うことによって、世界では「Fukushima」がどのように捉えられているかということを感じ、今の福島を自分の言葉で伝えられるようになる。

海外交流校（台湾：桃園市立龍潭高級中等學校，アメリカ：City Lab High Scool）※リモート交流

中間貯蔵施設見学

取組内容

飯舘村長泥地区訪問（5月）
実証実験の花を使用したしおりの制作
まちあるきLive配信ツアー（6月）
台湾の学生に飯坂町ツアーをライブ配信
アメリカの学生とリモート国際交流（10月～12月）
マサチューセッツ州の学生と月1回のリモート交流
放射線の基礎学習（11月）
放射線が身近なものであること、正しい知識を学ぶ中間貯蔵施設見学（12月）
過去と現在、そして未来の福島を自分事として感じる

事業名 ふくしま浜通りまちなか大学院2024

団体名 福島県立磐城桜が丘高等学校 科学部

この事業のポイント

2011年に福島県が直面し、今後の課題である県内の除去土壌（原発事故により放射性物質が付着した土壌）が保管されている中間貯蔵施設の最終処分や東京電力福島第一原子力発電所の廃炉について、双葉郡の現地を訪問し、実際に五感で感じることにより、現状を深く理解することができた。また、今後の福島の復興に向けて関連してくると推測される関係機関の専門家や地域住民の方々からの講話、NIMBY問題を抱えている地域との交流を通じて、高校生が東日本大震災の伝承の重要性を認識するとともに、福島の問題を「自分事」化することで主権者意識を高め、共感力・協働力や表現力、多様な意見を尊重する力などを身につけることができた。さらには、他地域や他県の同世代との交流を通して、福島の課題と復興の重要性を国内外に発信することで、コミュニケーション力も育成することができた。

沖縄県立首里高等学校との交流

取組内容

7月　・浪江まち物語つたえ隊による紙芝居講演
8月　・中間貯蔵施設見学・浪江町立請戸小学校見学
9月　・Jヴィレッジ見学
　　・原子力発電環境整備機構（NUMO）出前授業
10月・京都教育大学附属京都小中学校との交流
　　・日本原子力研究開発機構（JAEA）核燃料サイクル工学研究所見学
　　・双葉高等学校OB取材
12月・沖縄研修（沖縄県庁、沖縄県立首里高等学校、興南中学校・高等学校、沖縄科学技術大学院大学）
　　・筑波大学附属駒場中・高等学校、灘中学校・高等学校、成城学園中学校高等学校との交流
1月　・東京電力廃炉資料館、福島第一原子力発電所見学

事業名 SSH海外研修「台湾現地研修」2024

団体名 福島県立会津学鳳高等学校 SSH部

この事業のポイント

本校はスーパーサイエンスハイスクール（SSH）校として文部科学省から指定を受けており、以前より海外研修を実施している。台湾の高校生に対して、福島の現状や課題、復興についてプレゼンテーションし、福島の子どもたちが「ふくしまへの想い」を直接伝える活動は、事業の目的達成に効果的と言える。

正確な知識をもとに「想い」を伝えるために、事前研修として2つの活動を行った。1つ目は経済産業省職員による「ALPS処理水の処分に関する対応」の講義の受講である。現在でも賛否の分かれる困難な課題について、専門家からの説明の後、質疑応答、ディスカッションにより正しい知識を身につけた。

2つ目は、被災者による講演「震災当時の状況を知る～福島と宮城の状況～」の聴講である。震災当時の福島県浜通り地区や、宮城県の沿岸部の様子などを聞き、質疑や意見交換を行うことで、「ふくしまの未来」への「想い」を深めた。

これらの事前研修をもとに、現地研修では台湾の学生たちへ「想い」を伝えるべく、生徒たちは英語でプレゼンテーション発表を行った。

建国高級中学でのプレゼンテーション

取組内容

建国高級中学では、ALPS処理水海洋放出や、ふくしま産の食品の安全性についてプレゼンテーションを行った。その中で東日本大震災で被災した語り部の方から学んだ内容についても触れ、震災から10年以上の年月が経つが、復興はまだ道半ばであること、それらの課題を解決するための提案を行った。

別日には国立清華大学や関渡自然公園でも現地の大学教授や大学生、専門家に対してプレゼンテーションを行い、ふくしまに対する「想い」を生徒それぞれの言葉で伝えた。

事業名 「結」沖縄県立八重山農林高等学校×福島県立小野高等学校 友好交流事業2024

団体名 小野町

この事業のポイント

本事業は、平成27年度に、小野町議会議員の方々が石垣市を訪問したことがきっかけで始まった。平成28年12月9日に、小野町の名誉町民であり、同時に、石垣市の「ゆばなうれ（経済）大使」を委嘱されている東京農業大学名誉教授小泉武夫氏にご縁をつないでいただき、沖縄県立八重山農林高等学校と福島県立小野高等学校との友好協定が結ばれた。これまで、年に1回、お互いの派遣団を受け入れるなど、直接的な交流を通じて活発な地域交流を行ってきた。この交流研修の最大のポイントは、福島の現状を発信するとともに、互いに地域のよいところを発信、吸収し、町の産業の担い手や地域のリーダーを育んでいくことにある。また、総合学科である本校の特徴を生かし、小野町の特産品等への理解を深めることも目的の一つとしている。

両校生徒が伝承館で研修

取組内容

本年度の交流のテーマを「福島の復興を知ってもらうために」とした。本校生は、被災地の浜通りを巡り、伝承館等を訪れ、震災当時の様子を実際に見たり聞いたりした。また、福島に移住してきた方への取材を通し、「故郷の魅力を発信することが復興の手立ての一つになる」との思いを抱いた。10月末の台風の影響により本校生が石垣市を訪問することはできなかったが、1月に八重山農林高校生が本校を訪問した際に、準備したプレゼンテーションを実施した。「福島の復興の様子が分かった」「魅力ある福島にまた来たい」との感想を得ることができた。また、石垣民俗芸能が披露されたり、本校のそば打ち授業を体験したりするなど、両者の文化を理解する交流ができた。

事業名 台湾姉妹校との体験的国際交流を通じた未来へ踏み出す力の育成事業「白河旭高から伝えるふくしまの今、そして未来」

団体名 福島県立白河旭高等学校 第1・2学年

この事業のポイント

本事業は、ふくしまの復興と地域の魅力を海外で発信する活動を通して、地域の復興を主体的に考え、ふくしまの今を知り、思いを伝え・発信することを一つの目的としている。

そのため、本校1・2学年全生徒が伝承館での研修をはじめとして、浜通りの復興状況を知るとともに、地元白河市及び県南地区の企業や自治体の取り組みと現状、課題を知った。その上で、地域の魅力について探究していく学びを実施した。その成果について、本校の代表生徒が台湾の姉妹校を訪問し、現地の高校生や大学生との交流を通して、ふくしまの復興の現状や魅力を発信した。

また、台湾姉妹校との様々な交流を通じて、海外における福島県の廃炉（処理水等）に対する認識を深め、『ふくしまの未来』へつなげていくためには、より一層、発信や活動が必要であると感じた。今後も地域復興を主体的に考え、行動できる人材の育成を目的としていく。

台湾の高校生へのプレゼンテーションの様子

取組内容

これまで、主な事業として、東日本大震災・原子力災害伝承館での研修及び浜通りに関する研修を行い、復興の現状を確認した。また、「白河旭高フロントランナー」と称した、地元白河市及び県南地区の企業や自治体との座談会を通し、その取り組みと現状そして課題等を知った。その上で総合的な探究の時間を活用し、ふくしまの伝えるべき現状やふくしまの魅力等に関して主体的に考察してきた。

その内容をまとめ、本校の代表生徒が台湾の姉妹校を訪問し、高校生及び大学生との交流を通して、ふくしまの復興の現状を語るとともに、ふくしまの魅力を台湾で発信することができた。特に、台湾の高校生に対してプレゼンテーションや、グループディスカッションを通して、海外（台湾）の福島に対する認識を確認したり、ふくしまの今を伝えたりするなど、双方向的な学びが実施できた。

事業名 福島っ子、首都圏で大活躍の巻

団体名 相馬ながれやま踊り Junior の会

この事業のポイント

東京都での「みなと区民まつり」、神奈川県箱根神社での公演をそれぞれ実施した。その後、石川県穴水町社会福祉協議会と七尾市和倉温泉旅館協同組合と連携し、石川県で活動した。

「みなと区民まつり」、箱根神社での奉納公演では、小学生が中心となって活動し、大きく成長した場となった。

特に、「みなと区民まつり」は舞台も大きく、観客も多いにも関わらず、臆することなく堂々と演舞し、踊りを通して、福島の現状をたくさんの方々に発信することができた。

次に、石川県の活動である。石川県では特に、穴水町の活動において、のと鉄道穴水駅前にて開催されたマルシェを会場として、現地の状況を知るとともに、ふくしまの現状を発信してきた。「穴水の町に神聖な風が吹いたような気を感じ、胸が熱くなりました」といった感想を得た。

舞を通した発信

取組内容

事前学習として、先輩たちが、震災時にどのような気持ちで生活していたのかを話し、後輩たちの学びとした。その中で、震災後という過酷な状況でも、「元気」をもらう、「元気」を発信することの大切さについて、後輩たちが学ぶことはもちろんのこと、先輩たちも再認識した。

1ヶ月間に2～3回の活動日を設定した。

9月には箱根神社で、10月には東京都港区で催された「みなと区民まつり」で、震災学習で高めた思いをもとに踊りを披露した。

11月には能登半島地震の被災地である穴水町、七尾市にある和倉温泉総湯前広場にて踊りを披露した。「東日本大震災を経験した福島だからこそ、以心伝心、真心が伝わった」と確信できた。

事業名 震災の記憶と教訓を次の世代へ2024
～震災を知り、ふくしまの今を日本と世界に発信する～

団体名 福島県立あさか開成高等学校 Multicultural(マルチカルチャラル) Club (MC)

この事業のポイント

震災を学び、記憶と教訓を伝え、ふくしまの今を発信する活動を続け4年目となった。「想いの共有」と「ふくしまの未来を考えること」を目的に、広島・宮城・ハンガリー研修を行った。それぞれの土地(場面)での交流を通して、様々な災害(課題)を学び、そこで暮らす人、それを伝える人の想いを知り、伝え語り継ぐことの意義や重要性、そして、これからの「ふくしまのあるべき姿」について考えを深めることができた。

今年度は、3年前からリモート交流を行っているハンガリーのフマギ高等学校の皆さんとの現地対面交流、隣県宮城での学び、これまでこの事業に参加した先輩たちや語り部活動をする団体と『チャレンジ研修同窓会』と称して、卒業生との交流を新たに行った。このことからタテ・ヨコ・ナナメのつながりを強くすること、継続して学び続ける関係づくりや人のつながり「ご縁」の大切さを感じた。人と人がつながり「想い」を共有することは、明るい「未来」につながる。災害の多い日本に住む私たちだからこそ、震災の教訓を生かし、災害が起きたときに助け合うことが大切である。そのために、顔が見えるつながり『ご縁』を大切にしながら、「想いの共有」の輪を広げる交流を今後も続けていきたい。

念願の対面交流 in ハンガリー

取組内容

1　広島研修・・・平和、伝承、防災のために行動する!

①平和と人権を考える・核兵器廃絶への誓い(盈進中学高等学校ヒューマンライツ部との交流)　②「ハチロク」広島の原爆の日1945年8月6日のことを2024年8月6日に広島の方々とともに平和への取り組みや語り継ぐ活動から考える(広島平和記念式典班・福山市原爆死没者慰霊式典班・袋町小学校交流班・崇徳高等学校交流班)　③広島で避難者支援や復興支援に取り組む団体との交流活動(ひろしま避難者の会アスチカ・ひろしま紙芝居村・広島市防災士ネットワーク・矢野豪雨災害かみしばい製作委員会・南相馬ボラバス応援隊・崇徳高等学校新聞部・広島経済大学興動館災害を知り未来へつなごうプロジェクトの皆さん)

2　宮城研修・・・震災の伝承と復興を生かす!

①震災をめぐる事象と教訓を後世に伝え継ぐ未来を拓く場所(大川小学校)　②追悼・継承・感謝・未来を創造する協働の場(南三陸町・南三陸旧防災庁舎・南三陸3.11メモリアル)　③一次、二次避難の道のりを体感(志津川中学校・五十鈴神社)　④避難所と町民支援の役割(ながしず荘)　⑤いち早い復興とその道のりを伝える取り組み(女川町駅前にぎわい拠点)　⑥自治組織で日本一のまちづくり(東松島市あおい地区)

3　ハンガリー研修・・・継続的な交流、ふくしまの今を発信!

①オンライン交流から感動の対面交流(フマギ高等学校)　②ハンガリー文化交流

4　先輩たちとの交流・・・チャレンジから学び、つながる!

事業名 「未来につながる復興キャンプ 第2弾」プロジェクト

団体名 ガールスカウト福島県連盟

この事業のポイント

ガールスカウトは『そなえよ つねに』をモットーに防災・減災に関するさまざまな取り組みを続けてきた。福島に生きる私たち自身が改めて震災について考えるとともに、今後起こりうる災害についての対策を専門家から学び、「未来につながる復興キャンプ」を実践した。

ガス・電気・水道が止まった時に役立つ非常用グッズの開発や、簡単で美味しい防災食のクッキング、さらにストレスを解消するためのゲームや遊びを考案するなど、キャンプ生活を通して防災に役立つ知識とスキルの検証を行った。

宿泊を伴うこれらの活動により、少女会員（就学前1年～高校生）の生き抜く力と周りの人の役に立とうとする姿勢、確かな防災力を身につけることができた。

また、子どもたちが生き生きと活動する姿とたくさんのアイディアをSNSで発信してきたが、集大成として『防災アイディアブック』を作成し、シェアすることで全国各地の防災減災対策につなげていく。

磐梯青少年交流の家での集合写真

取組内容

・キャンプの事前研修の一環として、専門家である防災士を講師に迎え、防災講演会を実施した。
「今こそ 今だからこそ 防災力を高めよう」というテーマで、実際の被災体験をもとに避難時の備えや「もしもすごろく」を通して、避難時の行動等について学んだ。親子での参加や男性の参加もあり、関心の高さがうかがえた。

・「復興キャンプ第2弾」は、1泊2日の宿泊活動を通し防災関連のさまざまな技術と知識を深めた。実践した防災関連の技術についてはSNSで発信した。若い指導者や保護者が少女たちを支え、ともに活動を楽しみ、組織の強化につながった。

事業名 高校生・小学生横断 コメで伝える福島の農業の今
～農でつながり、国境と世代を越える～

団体名 一般社団法人 未来の準備室

この事業のポイント

福島における東日本大震災からの復興の経験を、農を主題として探究し、発信するプロジェクト。特に、高校生が小学生をリードする形で、震災についての学びを深め、小学生にもその意味を共有しながら、さらに交流相手国の台湾・新竹市の小学生や大学生にも、その価値を発信した。

年代・国籍を問わず、ともにその魅力を楽しむことができる「農」をテーマにすることによって、世代と国境を超えた交流を企図した。

まず、福島県における原発事故後の農業についての影響を、展示施設見学と事業者へのインタビューを通じて学んだ。その上で、現在進行形で存在する、東アジア地域からの風評被害払拭を目標として、福島のお米に親しみを持てるようなパッケージデザインに小学生が取り組み、高校生が福島の米の安全・安心を発信するチームワークで、福島の農の課題と魅力を発信した。

実際に台湾・新竹市で白河市産のお米を炊飯し、現地の給食として一緒にご飯を食べる経験ができた。

交流した新竹市「實人教育」学校
児童のみなさんとの集合写真

取組内容

東日本大震災からの復興の経験を、農を主題として探究する、高校生・小学生を横断したプロジェクト。白河市周辺の高校生・小学生が、原発事故後の稲作について見学・インタビューを行い、震災の影響と復興を学んだ。福島の食の魅力を発信できるよう、パッケージデザインやプレゼンテーションに取り組み、実際に台湾現地を訪問。新竹市の小学生らと白河産米に舌鼓を打った他、現地住民や大学生にもお米を配布した。配布したお米は、新竹市の小学生と、白河市の高校生が実際に2024年5月に白河市で植え、収穫した米である。

事業名 ふるさと創造・映像教育プロジェクト 2024

団体名 ひろの映像教育実行委員会

この事業のポイント

平成27年度より総合的な学習の時間を活用し、シネリテラシー※による「ふるさと創造学」を開始した。生徒たちは、自分たちが生活している地元地域の歴史、文化、伝統、くらし等について見つめ直し、地域住民とのふれあいの中で、広野町、郡内の魅力のある部分を発見、再確認し、中学生ならではの考えや思いを大勢の人に伝えるためにはどうしたらよいのか考え、自主的に活動ができるようすることを目指している。

現在は、映像形態だけにこだわらず、冊子やマップ作成等の新たな手法も用いながら活動を継続している。

※シネリテラシー … 映画制作を用いた主体的な学びの手法。

1学年：町内「岩下観音堂」を
訪れた時の様子

取組内容

1　学年テーマ「地域を知る」
中学校3年間実施する基盤とするため、広野町・楢葉町の震災からの復興や地域資源の情報収集、現地訪問等による学習に取り組んだ。

2　学年テーマ「地域を発信する」
2025年東京デフリンピックのサッカー種目がJヴィレッジ開催ということもあり、職場体験、震災との関連性やユニバーサルデザインをコンセプトとした学習に取り組んだ。

3　学年テーマ「地域を創る」
フィールドワークにより収集した課題等を検討し、子ども議会において質疑を行った。

事業名 2024 福島県立安積高等学校 エッセン交流事業（ドイツ高校生の福島受け入れ）

団体名 福島県立安積高等学校 教務部

この事業のポイント

本事業は、本校と過去4年間に渡り交流を継続し互いの学びを深めてきた。ドイツエッセン市のウルフスクーレ学校の生徒、教員を初めて福島県に招聘し、本県の被災地や震災関連施設等を訪問し、震災で甚大な被害と影響を受けた地域の復興に向けたこれまでの取り組みや、復興の現状と課題、今後の展望等について主体的に考えるとともに、発信する活動を行う。本県の震災からの復興について主体的に考え、発信する上で、第三者から伝え聞いた間接的な情報やインターネット、書物等から得る情報はもちろんのこと、直接自分で見聞きし、直接当事者と対話することを通して肌で感じ取ることができた体験そのものには他の何にも替えられない価値がある。これは、本県の復興について主体的に考え、発信する活動を、一層意義深く価値のあるものにする助けとなることが期待できる。

また、本事業についての発信は、本校での探究活動発表会でも計画されており、県外の複数の高校や教育関係者に対しても本県の復興の正しい理解を深めることの一助になることが期待される。加えて、来年度以降もウルフスクーレ学校と安積高校との交流事業は継続的に行っていく計画であり、今年度の成果は両校の後輩たちにも引き継がれていくこととなる。

これは、福島県の復興について理解を深めることと福島県の復興についての継続的な発信の機会となる。

歓迎式での集合写真

取組内容

～事前学習～

①本校での歓迎会（両校校長挨拶、参加者自己紹介、本交流事業の主旨・目的の共有）、郡山市長表敬訪問（スピーチの翻訳、エッセン市と郡山市の結びつきについて学ぶ）、交流活動（アイスブレイク、両国に関するクイズ形式での協同学習）。

②伝承館・請戸小・廃炉資料館見学。震災による被害や原発事故の実態、現在に至るまでの住民と環境への影響、復興の現状と未来への道筋等について学習。安積高校による英語プレゼンテーションとディスカッション。

③ウルフスクーレ学校による英語プレゼンテーションとディスカッション。ロゲイニングによる、郷土の歴史と日本の文化や伝統に関する協同学習。各家庭でのホームステイ受け入れ。

④終日各家庭でのホームステイ受け入れ。

⑤本事業の振り返りと送別会（参加生徒が各々の経験と感じたことを全体で共有）。

～事後学習～